# こころの光

## 靈恋の巻

目次

題辞
親子の親しみ
余韻
起信論講義（1）……一
反響
親縁……五

## 親子の親しみ

子を憶ふ親の心は親を念ふ子の心と常にはなれず

聖典に　如來の光明は遍ねく十方世界を照して念佛の衆生を攝取めて捨給はずと。此意は如來の光は普遍に照し亘れ共、殊に念佛の人に聖意が感應て、光明の中に攝めて給はると云ふ事である

善導大師は此文意を衆生行を起して口に佛を稱ふれば佛卽ち之を聞給ひ、身に敬禮すれば佛之を見給ひ、心常に佛を念ずれば佛卽ち之を知り給ふ、衆生佛を憶念すれば佛も還た衆生を憶念し給ふ彼此の三業相捨離せず、故に親緣と名づく。（斯意を今圖に表はしたのである。）

如來は私共の大御親にて、私共の靈は其子である。如來の恩寵に由て私共の心靈は靈育て、聖き人と爲して頂くのである。

私共には靈性と肉體とが有りて、肉體は人の子で、靈性は如來の子である、肉體も*母親の乳汁にて養なはれる樣に、靈性は如來の光明にて育てられるのである肉體も赤兒が初めて產聲を揚た時には母の顏さへ見えねども啼く聲を便に母が乳房を含ましてくれる乳を呑むから次第に成長する如くに、私共の靈性も、如來の光明名號の眞理を聞き、如來は實に私共の靈の御親であると、確かと自覺した時が恰ど靈の子が產れたので、眞から稱名の聲が

我み佛の慈悲の面
朝日の影にうつろひて
照るみすがたを想はへば
靈感極りなかりけり

發する樣に爲たのが靈性の産聲である。稱名の聲は發する樣に爲たが未だ御親の慈悲の聖顏は嚐めぬ。然れども稱名の聲する處に如來の靈乳は與へ*て給はる卽ち念佛心に如來の光を感受するのでそれが靈を養ふ食物である。夫より漸次に光明を受る丈に靈性が益々發達しつひには如來慈悲の聖容を拜めるやうになる。亦平常も御慈悲の懷に安住しつゝある身と想はるゝ懷しい親樣と寢ても寐ても共に在て離れぬ想である。而すると弱き私共の心の生活に非常に力と爲る。如來の聖寵と私共の心との親密な因緣(は此圖に示されてある。)

宣傳師は僧に限らず
分に光明獲得したる者は
宣傳する資格ある者とす

# 起信論

(1)筆記(註——親筆無し)

初に玄談通じて宗教を哲學として研究するに先づ三門に分ち、

一、宗教形而上論〈客體 主體〉

二、宗教心理論〈安心 卽信解證(證得すること)等—個人々々で立派なる精神と(す)る、ちようど玉を磨き上げたる如く、

三、宗教倫理論—起行

本の玄理を講究するには論の必要あるなり。卽ち形而上論唯識等は推理論等なり。

心理論は主體客體の關係上の心理。

信心獲得したる(眞如觀成就したる)心象なり。

信仰獲得の上は眞如の理と自分の心と一致するなり。

知力　啓示　心眼を開いて慥に認め得る。

感情　融合　(如し)眞如の理の中に安住し生活する。

意志　靈化　眞如の理と關係し又以前と異なり眞如に相應したる心なり。

眞如の理と相應したる意志によりて活動す。

倫理論は如何に修養せば宗教心を喚起し眞如と相應する心卽ち菩提心を喚起し開發し、目的たる佛道を成じ得べきや。起行に依つて前の心理を充分出來る樣にするなり。倫理論は修行の方法及階級を說明す。

形而上論は推理上の說明なり。

形而上論は何故に宗教の主體なる人の精神と、客體なる眞如の理とは調和し一致することを得るや。又この兩方の本質は而形上に於て一致すべき性能を有するやを論ず。

此の兩方の關係を可能にすべき理由を演繹に依り、又歸納法によりて其の原理を推論す。

演繹は形の上は別にして、如何して一致する事が出來やうや。其理を推して是は一致すべきものである。

歸納法は信仰心の上一分を見屆けて、廣く無限に眞如の理は斯樣なものであると知るが、歸納法なり。

形而上論は眞如は斯々ならざるべからずと說明す。

心理論は斯々なりと示すことを得る。

起信論は佛教哲學であるから、初めは形而上論で多く云ふなり。

彌陀の本願力によつて助かると云ふ事は(完全)な理性をもつてゐる人には信ぜられぬから、本々理を推して極々たくみに關係し、たくみに

學說によつて說明し斯樣にせねば承知出來ぬ。

四

淨敎の形而上及心理

觀經の疏は實行上の心理現象

善導大師觀經について實地信仰した上で證明し心理上の事を云ひ、斯樣であるから斯樣に出來る關係すると證明の上でいふ。本の理を推して云ふにあらず。

往生論は形而上を論ずる如し。

形而上論二 { 客體……本質
主體……性能

客體二 { 本體論……本體は眞如實在卽ち眞如の本質は何なるや其の內容は何なるや。
宇宙論又如來論とも云ふ。

一切事物の關係は何に寫象せば可なるや。換言せば宇宙を構造する諸の部分相互の關係、又全體と部分との關係は如何に見るべきや。卽ち我々と如來藏性との關係は如何に見べきや。

（以下次號）

人には肉我と靈我との二面存せり。

親緣の主體は人の心情の如來に對する靈戀是なり。

愛慕卽靈的戀

## 異性相愛

人の心には肉我と靈我との二面在存せり。肉我なるものは同氣相求むと云ふ如く同性相愛は自然の理ならんかと思ふに事實は然らず。異性相愛親和は天然的に生理の規定として存せり。

衆生と如來とは同一の法身を體とすとせば理性に於ては相方致一すべき理なるも、本質內容に於ては如來の純淨たる聖靈的なると衆生の煩惱汚染なる心情と此正反對なる異性が如何にして親愛相和の關係を可能にするやとの疑問起らんかなれど、此反

五

對なる兩性が遐つて相愛密接の關係を希求する性能の存する事は生物の異性、卽雌性と雄性とが同性に對するよりは却つて異性相愛親和の密接なる關係をなす性能を有する例に於ても知るべし。

而して異性相愛の性能存することは肉我が自然の生理的に規定せられたるより生じ靈の生佛相愛の性能存することは神的宗敎的靈的規定の天則なりと云ふも不可ならざるべし。肉我が異性相愛なるものは生理的衝動より生じ靈我が神の靈を戀愛する情は靈的衝動より發る。

人には肉我と靈我との二面ありて肉我の感情のみを完全に發達すとも靈我にして發展せざらんか他の動物と何ぞ擇ぶ處あらん。

肉我の感情が異性との相和を求むるは生物の天性なると亦動物の祖先より襲ひ來り遺傳性とあれば人に情の存するは言ずもがな而も之が爲には此慾心を滿たしめんが爲には全力を盡して求むる事は凡ての動物に於ても知らるべし。

人は肉我よりは尙一層高等なる靈我の生活とならんには此の對象となるべき衆生と、異性なる如來の聖靈に感接して此の靈と相愛親和の關係によりて靈の生命に入るにあらずや。

六

靈我が如來の聖靈に感接せんとの愛戀は靈的衝動靈的憧憬としこ現はゝ此靈戀感情こそ、如來の聖靈と相和靈的交感して靈の生命に入るなり。此靈戀てふ感情こそ孔子が賢を賢として色に易へよと言し言は好色を愛する程に賢者を愛慕せば己も亦賢者の同侶たらんとなり。

異性を戀愛する程に靈を愛戀することあらば必ず聖靈に感觸すること焉んぞ夫れ難からん。左れば聖法然は、

「かりそめの色のゆかりの戀にだにあふには身をも惜みやはする。」

世の人々は肉我の有限なる假初のことにも甚しきは身をも命をも忘るるものさへあるではないか、況や靈の無限の靈福と永恒の生命となるべき靈界に靈我の感情を滿足し得べき對象を求めて止まざる時は必ず得らるべきものぞ。

法華經に衆生已に信伏し質直にして意柔輭にして而も戀慕を懷き一心に佛を見んと

七

欲して自ら身命を惜まざれば大愛の化現たる佛最も麗しき可樂見其身を現じて爲に説法すと。

如來の靈應身なるものは衆生が一心に如來を見んと欲する靈戀の彈き力が法身との感應によりて客體化して現ずるものにしあれば聖靈を愛戀する結晶とも云ふべし。

如來は本來このかた第一義諦清淨智惠の相として宇宙に滿るとも衆生の靈戀あらざるよりは靈應の妙相現すべきなし。

## 如來の妙色身は大愛の化現

肉と靈とは本より清濁天懸するも亦自然に同一形式存する樣に思はる。

生物進化の理に生物なるものは原始劣等なるものが次第に進化し來つて現在の人類の如きにまで到れる原理は自然に生物を淘汰する自然理法ありてなりと。亦雄雌陶汰の理法とは生物の雄性なるものが異性を求むるに異性の愛を購はんが爲めに專ら動勉したる結果累代に發達して美を呈するに到れりと。異性の愛を得んとの性力が愛を得んには善にあり。或は色の美、聲の善、鳥類に云はゝ孔雀の尾鷺の聲の如く皆異性の愛を購はんとの性自然より陶汰せられて發達したるを雌雄陶汰の理と云ふなり。

月髓天懸せる神人の關係に於いてもそれと相似たる例を見る事を得べし。

宗教的客體なる神の表象たるものは最勝最美の一切に超絶したる妙相を以て其の身を莊嚴して衆生に對面す。而も衆生に對して最强度の愛慕を惹起すべき動機即ち宗教的靈戀の對象者たり。

如來妙色身、世間無與等、無比不思議、是故今敬禮。如來色無盡、智惠亦復然、一切法常住、是故我歸依。如來の勝應身は八萬の相好光明遍ねく十方を照し滿身の愛を以て衆生の信愛を照覺す。

如來は本第一義諦智惠の相なれば、世諦の相としてこぼるゝばかりの愛嬌の姿を以て衆生に對する理は無いなれども、如來の活動力なる大愛は巍然眞如または無相寂滅と云ふべき非動の物にあらず。如來の妙色相は愛の權化なりと云ふべし。如何にせば衆生の信愛を得べきぞと全力を盡して衆生を求むる樣に吾人の感情には感じ得らる





如來の本體は一切諸佛が同じく證覺の智見を以て相見る時は平等理智彼此の相なし若し一切諸佛は同じく如來法身を體とし其內容に於ても全然一致したるものとせば同氣相求め佛陀はまた佛陀を求めて相愛の力を注ぐべきに左なくして却て其性質の反對せる凡夫汚濁の衆生を求めて親和力を注ぐとは何ぞ夫れ奇なるや。

是また異性相愛の宗教的理性の天則と云ふなるべし。

## 靈の愛

如來は本第一義諦にして世諦の相は離れたるものに在せども唯一切衆生を愛する處絕對的愛として衆生に對して滿面の愛を表して衆生に求め玉ふと云ふ事を信知する時は吾人が宗教的衝動は大なる愛との親和を得んが爲に靈的憧憬として一に神を愛慕して之と交感せんことを願ふは是宗教的要素に豐富せる感情即ち宗教的天才に於ては殊に然るべし。

古來プラトー的の戀などゝ、是れ靈の憧憬靈の戀なり。若し靈戀の深き感情にあらずば最親密なる感情調和は難かるべし。

靈界の偉人宗教的たるもの感情は實に一種言ふ可からざる靈戀の不可思議的感情なるものが、精神眞髓に存して赫々耀々として活動し、理想を高尙なる神の中に投影し身は茲に在つて想は美天國に逍遙する如き、龍樹天親の頭上には化佛常に耀々と光を放ちしならん。我聖源信が「ぬれば夢さむればうつゝ東の間も忘れがたきはみだの面影。」とのたまへる此聖者の宗教的感情靈的憧憬は知るべきなり。大愛の權化たる靈力は聖者の胸中に往來し活躍し耀々として光を放ち實に斯る不可思議なる靈能こそ是全く高僧を源信如來とまで衆人が歸依を拂ふべき靈格化し給ひ來りしなり。聖法然が「我はたゝ佛にいつかあをひ草心のつまにかけぬ日ぞなき」

「あみだ佛と心は西にうつせみのもぬけはてたる聲ぞすゝしき」

佛陀の愛は斯る感情の中に宿るべし。如來の靈は此の靈的衝動に在つて活くべく、斯る感情こそ如來の靈を請すべし靈界の偉人と呼ばれ宗教界の豪傑と稱せらるゝものに斯る經驗なきもの無かるべし。彼の一休宗純なる僧あり。洒々磊々彼が如きもの少

なからん。彼は世の名利に對して無貪着なるに拘はらず宗教的感情に富める事を知るべし。

世に一休譚あり。本々譚なれば後人の作かは知らず。然れども彼が求道者としての修行中のものは彼が宗教的感情を穿ちたる如し。彼青年の時專ら座禪し工夫する時に鬚髮長くのび顏色憔悴せり。時に信者居士等が之を愁ひて醫師をして診察せしむるも曾て異狀あるなしと。在俗の輩彌々之を憂思し謂らく和尙年青壯若しは世の青年を煩はす處の戀なる神の業には非ずやと和尙の身を惜しくや思ひて問ければ和尙竊かに紙筆によりて其の實を陳ぶ。

「本來の面目坊が立ちすがた一目見るより戀とこそなれ」「我のみか釋迦も達磨も阿羅漢も此君故に身をやつしたれ」。

他の人戀てふ事は性肉的愛戀のみと知るも靈の愛戀こそ靈界の偉人を産出する原因なる事を知らずや。

此の譚に記する處全く一休和尙の宗教的感情を露發したるもの又何人か此の靈戀に依らずして靈界の美人に接觸することを得べき、本來の天眞佛は見る事を得じ。

## 靈の戀

世に極端なる利己主義を主張する輩あり。彼等は謂らく凡ての生物は利己を以て本能とし己を愛する外に他を愛するの本能なしと云ふは余り極端ではないかと思ふ。人類には本能的に一種不可思議の感情がありて人の精神生活の中心に伏在せるに非ずや彼は我と彼自と他とを同一視し異身同體の如くにまで利害を共にする能力あり。是何ぞや愛なる者是なり。

此愛なる者は最も强き感情の糸を以て我と彼とを維繫す。普通はこの感情の寡も强き者は親と子との間に亦異性の間に現する者に於て然りとす。

生理の自然に約束せられたる異性の親愛は最親密なり。然れども客觀的に形を異にしたる異性の間に見る處の親密なる者よりは尙一層深く彼我の親密なる感情の存する事は宗教的感情即ち神に對する靈の戀愛なるものに發見すべし。





斯る宗教的感情が神秘的に神と合一し小我と大我の冥合せる如きは人と人との相愛の夫れよりは親密である。

小き我が無限大なる眞我と冥合する事を得。靈戀の愛なるものは純潔にして淸淨なり。神を愛し神に愛せらるゝ此の相愛の關係より出來る愛なる者は肉我の愛とは異にして神より愛によりて愛化せられ又博く一切の衆生を愛する仁愛となる。

如來の相愛々化は親靈の中心にして是心情の信仰と云ふべし。此の如來の愛と融合し得る先驅としては感情の愛即ち靈愛である。靈を戀愛する感情なり。

此靈戀こそ宗教的生命に入るべき發足點なり。靈戀なくして神人交感の妙を得べきなし。神人交感は人の心靈を神の靈と融合して靈化する妙契機なり。

### 靈戀は人を神化する

絕世の英雄も肉の奴隸となり肉我愛戀の爲に斃さるゝ事を免れざるは無明の雲心にさへぎり罪惡の種子內面に伏在すればなり。

宇宙洪漠なるも世界廣大なるも以て精神を照す光明にして無からんか、靈の偉人が出世せざらんか世は闇暗なり。宇內をして心光普く照し一切の心靈を度脫する處の聖者は出たり。斯る聖者は肉の愛より生したるものに非ず斯る聖者は靈の愛により姙娠せられたり。

思ふに其身は四海を保ちて萬乘の高きにあり天下の榮耀を已一人に聚め金殿玉樓に身を安んじ珍寶瓔珞に席を飾り三千の後宮は間斷なきまでに嫺樂を供し深閨は寡も愛情を濃にすべき皇妃は天下に亦なき艶姿と賢明とを共に備はり滿腔の愛敬美を以て常に側に侍るあり。加之玉の麗しきを呈せる愛子を已に設けたる恩愛の情寡とも深き處の父王。いかに悉多太子の要求なるか。

肉によるの愛は麁なるを觀し靈によるの親愛の妙なるを慕ひ人間界中またも得べからざる位もまたなき榮花をも破れたる履の如くに捨てゝ專ら靈界を愛戀したり。

若し肉我の生活としては又之に加ふべきあらんや。斯る恩愛の情をも顧みざる太子は人格の要素たる感情なるもの缺けたる冷酷なる人なりと云んか、否決して太子は人格に於て缺點ある人にあらず。平凡の人よりは寡豐富に寡圓滿なる人格なること

は言までも無らん。然て彼の賢婦ヤスタラを愛せざるに非るべし。愛子ラフラを思はざるにはあらざらん。又父王の恩愛を感せざるにはあらざらん。されどもよりは〳〵寂も深く寂も厚く愛すべく戀ふべく慕ふべき者あればなり。

瓔樓にありて百千の婇女は麗きを競ひ芳きを爭うて各百般の伎藝を盡して太子の歡樂の器具を奉るも敢て樂とせざる太子は玉床に坐して沈思默考憂色に堪ふ可らざる者に似たり。如何なる天の伎樂も樂とせず如何なる珍膳も亦甘きを覺へざるが如く唯鬱々として而も寢食を忘るる迄になり給ひぬ。抑是何の爲ぞ。

抑も美壯年なる太子に豐富なる感情なるもの精神的中心に存在し理想あり戀愛ありとせば太子が理想せる處の戀愛の對象は是那邊ぞ。若し無明闇痴の雲はれて本覺直如の空清き

舍那圓滿の月　顔、見まくほしさに戀すなれ
一度び肉の我となりし、罪の衣を被し身には
慕ふ心は深けれど、逢坂の關趣え難く
是だに稱はぬ世なりせば、活き存ふべき甲斐やある
狹き心にあらなくも、深き思ひに沈みける
堅き心の一筋は、巖岩をす徹すと聞からは
金剛不壞の意志をもて、恩愛緊縛の網を斷ち
娑婆即常寂土、舍那清淨の法の身は
妙なる姿妙にして、現在說法と聞きつれど
肉の心につゝまれし、無明の雲に覆はるゝ
此土と彼土とは一重なる、無明の雲ぞ隔つなれ
されど濁りの世になへて、塵のちまたを立ち出でゝ
しずけき山に入りてこそ、靈き國は開き見ん

世を去りて太子今は先づ身の繫縛を解れたり。誰を媒介と賴みて我理想せし靈界の美人を我が物にせばやと。時に名にあふ老仙あり其名をアララと云ふ。太子は此老仙を訪ふて己が所願を陳べにける。抑此老仙は年壯にして世を遁れ修道行法功積りあらゆ





る仙中の仙なりとかや。

太子此老仙に己が所願を陳べければ老仙は威嚴神の如く烱たる眼光は電に似たり權威ある聲を以て謂へらく嗚乎壯年なる求道者よ汝眞理の靈界に入て眞天の面目を見んと欲せば先づ從來の有し來りし迷妄罪惡の心を脫却せよ。肉の我なるものは罪惡である。罪惡の源は迷である。迷の源は冥初である。此の冥初の雲はるゝ時は四禪の空は澄々として清らかにならむ。

汝知らずや無窮の蒼天に日月星辰の燦然として光を放つは是四禪天を掩ふ處の幕ならずや。汝が冥初の心の迷の霧る時是幕は自ら開け非々想天の殿顯れん。

斯の非非想こそ宇宙最頂の處にて此に比すべき天はあらじ。汝が理想せる處のもの果して茲に得べけんと。

太子即ち道士は老仙の敎に隨ひて寂莫無人聲の床に坐して深禪定に入にけり。さすがは天性叡智深遠なる太子は老仙が數十年間勵修苦行の結果として獲得したる四禪の宮殿は未だ數日間を經ざる程に正に得たり。太子今は冥諦の雲はれて四禪の空は澄渡靈我が能く肉我を制伏して聖きに向上する士を菩薩と名付く、若し肉我にして靈に勝つ時は忽に全精神は妖魔の爲に奪略せられん。三の魔女は種々百般の秘術を盡して菩薩を眩惑せんとするも道はマカサツ、決して其の紐に懸るの怖あらんや。菩薩自から警悟す。汝宇宙に充る處の妖氣魔風がいかに力を盡して我を誘惑するも爭でか我を動かすべき。時に菩薩深く三昧に入つて聖靈に充され、自から醒め來りて觀ずる時は、胸中に彷徨せる肉我の迷雲を吹き霽して觀ずる時は、目前に彷彿たる魔女の幻妖桃李盛なる色天上天下に二なき美色とは肉我の生理に規定せられたる愛てふ魔力あればこそ、若し肉我の魔醉が聖靈に充され醒め來りて觀ずる時は未だ央ざる芙蓉と已に萎縮せると焉ぞ夫れ異らん。

肉我は肉愛に充さるゝが故に花の顏玉の膚に迷醉しぬべし。若し心機一轉して聖靈に充され迷ひ醒め來りて觀ずる時は老衰せる婆女と何ぞ異らん。何の迷ふべきなし。

ボサツ初め暫く肉愛をもて見るが故に妖姿に價千斤、心機一轉し聖眼を以て觀じ來

れば傷むべま老婆子。菩薩は一心に如來親緣なる慈愛の光に胎れる聖き勢力をもて肉我の主を降伏せんとす。我見の城廓は已に沒落せんとするに際し、無始以來横領し來れる主我は聖き我に降伏せんとのいかにも殘念にや有りけん、主我の大王と仰ぐ處の天魔の軍勢を藉りて飽くまでに防禦しまた逆襲せんとし、忽ちに闇黑の颶風百千の雷電天地破裂せんばかりの修羅場は現前に演出せられたり。爰に於て菩薩は思念すらく汝ら魔王及び魔軍らよ。若し我れ肉我が主たらば我もまた汝が眷屬たり。汝が命令を奉せざるを得ず。我は已に肉我を降伏して聖き我に隨はしめんとす。縱令惡魔らが百千の雷を鳴らし千萬の颶風を吹き起すとも天空さやかに照り渡る月には障りあらざらん。聖き靈なる聲は心の耳にさゝやきける時忽ち雷霆響を收め電光消え迷妄の黑雲はかき消す如く無くなりぬ。

時雨の吹霽したる後の空はいとさやかなる月の光も一しほ色勝り天の清き灑ふが如く牟尼は寂然として禪定に入り三摩耶の寶鑰をもて涅槃城の門を開き、無上菩提の宮殿に入らんとするに、東の天に明星の輝き出る頃ほひ、囚然として眩しきばかりに輝き來る光こそ自性天眞の天使なれ如來親緣の光なれ。忽ちに天開け地闢け骨て見來りし處の乾坤は跡を伽耶の霞と消えて、從來畫と見し世は夜とも覺しく、聖き眞實の曙曚とはなれり。肉眼に見し狹き宇宙は跡たへて眞の宇宙は顯はれたり。靉靆として彩雲空に聳へ香風馥郁として四方に薫じ天華紛々として空に飜り諸天樂を奏して心王の美德を讃ず。

心眼開き來りて觀ずれば蓮華藏世界法界宮に廬舍那如來、盡虛空界の身に塵沙の相好を備へ一々の相好よりは無邊の光明を放つて普く衆生の信念に應じて利益を與へ給ふ。

昭和八年三月二十五日　印刷　　點代郵稅共
昭和八年三月二十八日　發行　　年二四

發行人　小石川區關口町六十五番地　山崎辨成
印刷人　小石川區關口町六十五番地　小林七太郎
印刷所　東京市小石川區水道端二丁目四十四番地　靜文社印刷所
電話牛込五四一九番

ミオヤのひかり社
振替口座東京六六八五一番